

---

# 止めのファンデブ

中等遊民

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

止めのファンデブ

### 【Nコード】

N8596V

### 【作者名】

中等遊民

### 【あらすじ】

商業都市として潤う都市国家で徴税吏見習いをしているしがない若者と、その友人で、大商人の依頼で密輸品の護衛を請け負った失業中の傭兵。そんな二人の身近で起きた一件の殺人事件。事件の真相を追う二人ははからずも、領主、教会の実力者、大商人の思惑が交錯する陰謀の渦に巻き込まれてゆく。

## ブローグ

フクロウの鳴き声が聞こえた。闇夜の森の中で目に見えるのは、カンテラに照らされた馬の尻と前方の泥道、そして先頭を走る荷馬車の灯りだけだった。

「お前えは今までに何人殺した？」

そんなダミ声が荷馬車の後ろから聞こえてきたのは、ちょうどデルブレー山脈の針葉樹林帯から、アグレッツサ領内の広葉樹に覆われた霞の森に入った頃だった。

「俺は今までに八人殺ったことがある。おい若えの、鶏一匹締めたことねえようなツラしてんな？」

ダミ声がゲラゲラと笑った。

「そ、そんなことねええよ！俺だつて四、五人殺してたんまり稼いだことがあるぜ」

別の若い声が慌てて否定する。

荷馬車の前席で御者に並んで座っていた筋骨たくましい大男は背中越しにそんなやりとりを聞き、うんざりして頭を掻いた。男の名前はガスコン・パンタグリユエル。ついこの前まで、誇り高き戦争屋と呼ばれていた若き傭兵であったが、昨今の近隣の平和状態すっかり仕事にあふれ、今ではケチな商人お抱えの用心棒をやっていた。今夜のように商人の密輸品の護衛をしたり、財宝を納めた蔵の見張りをして、わずかばかりの給金を貰い食いつなぐ毎日だ。当然、こんな仕事にはヤクザ者やクズ野郎が多く集まってくる。そんな者達と一緒に仕事をしなければならぬ今の状況に、ガスコンは小さくため息をついた。

「おい、兄ちゃん。お前はどんなんだ？」

ダミ声が今度はガスコン背中を叩いた。前席で進行方向へカンテラを向けていたガスコンは面倒臭そうに振り返り小声で言った。

「さあな、忘れちまったよ」

話はそれまでだとばかりにガスコンが前に向き直ろうとするその肩を、ダミ声がぐいと後ろへ引つ張った。

「へえ、言うじゃねえか。なら、どうやって殺った？ この俺に話して聞かせる」

どうやら応対の仕方を間違ったらしいとガスコンは思った。本来、周囲に注意しながら通らねばならない森の抜け道で、こんな無駄話にふけていては、とても密輸品を狙う盗賊の奇襲には太刀打ちできない。

ダミ声の中年の男は、黒い不潔な長髪をふりみだし、前歯の抜けた悪臭の放つ口で、ガスコンに言った。

「その顔の傷も、粹がって自分でつけたわけじゃねえよな？」

男はゲラゲラ笑い出す。ガスコンの左頬から鼻にかけては、まるで地割れのような傷跡が走っていた。以前戦争に従軍した際に敵の騎士によって斬られた傷だった。向う傷ということもあり傭兵にとっては勲章のようなものだ。本来、場所が場所ならこんな侮辱を言う者は只では済まさないところだが、今は喧嘩ができるような状況ではないので、ガスコンは首を振った。

「ちげーよ。ほつといってくれ……」

ガスコンは再び前を向き、カンテラの光を進行方向へ向けた。森は深くなつてゆき、道は泥もしくは荒い砂利に覆われた地帯にさしかかる。本来、街道を通つて西の山地からアグレッサの街に入るには、山のふもとにあるノックス砦を通過しなければならないのだが、砦を通過し石畳で舗装された街道を通るには、馬車や積荷にかかる多額の税を領主に支払う必要があった。特にアグレッサは、内陸部の諸都市と港湾都市ポート・フォリオを結ぶ街道の中継点に位置し、そこを通過する多くの人や物にかけられた多額の通行料と関税によつて潤っていた。

当然、商人たちのなかには、領主による課税を免れようと考える者も多く、知られていない抜け道や獣道を使って交易を試みる者もいる。ただ、人目につかない深い森や山道には、その交易品を狙つ

て盗賊たちがはびこり、道中は極めて危険だった。その為に、商人たちはガスコンのような用心棒を密輸品の護衛に雇っていた。

今回の彼らの雇い主はアグレッサの経済を手中に収めているのはギルドと呼ばれる商業組合だった。それも、様々な業種のギルドの中でも、アグレッサ領内で物資の運搬の中核を担う、馬車や荷車業を掌握しているギルドだった。これら運送業を支配する大商人達は荷車ギルドもしくは物流ギルドと呼ばれていた。

今回の仕事はアグレッサの物流ギルドからの依頼だった。やたらと重い大小の木箱計四十箱余りを五両の荷馬車に分けて載せ、アグレッサの西にあるデルブレー山脈を越えた商業自由都市アーロンからアグレッサの街まで、森の抜け道を通って護衛するのが今回の仕事だった。

霞の森に入ってしばらくして、その名のとおり、あたりは徐々に霧がたちこめてきた。涼しいが湿度が高いこの森は、霧がでることが多かった。ガスコンは舌打ちした。さっきまではつきり見えた先頭の荷馬車のカンテラの灯りが、ぼんやりとしてオレンジ色の鬼火のように見える。ガスコンと御者は後ろの馬車へ振り返る。背後には三両の荷馬車の灯りが、同じくぼんやりと見えた。

「嫌な陽気だな。もっと速くとはせないのか？」

御者は首を振った。

「ここらは道が悪い。下手にとばすと、馬車がひっくり返るからな」御者の言うとおり石ころ道に入り、先程から馬車自体がガタガタ振動している。

俺が盗賊ならここで待ち伏せする…… 頼むから何も起こるんじゃないぞ

ガスコンはそう思いながら、腰の剣帯に繋いだカッタラスの柄に手を置いた。

後ろでは先のダミ声がしきりに、犯罪じみたこれまでの『武勲』を自慢し始めた。ガスコンにはこの男の剣の腕など知る由もなかったが、大抵こういうタイプのヤクザ者で本当に剣の腕がいい者は少

ない。恐らくもう一人の若者のほうも見たところ、修羅場の経験したことなど無さそうだった。

この荷馬車にはもう一人、護衛に雇われた無口な男がいた。こういう仕事には慣れている様子で、その落ち着いた様子や使い込まれた腰のブロードソードを見るに、はじめは頼りになりそうだとガスコンは期待したのだが、結局はこの男も頼りにできないと思うようになった。というのも、その男からは絶えず酒の臭いがしていたのだ……

荒れた道が緩やかな左カーブに差し掛かった時だった。霧の中で前方の荷車の灯りが大きく揺れた。そして、悲鳴と共に前の馬車から誰かが転げ落ちた。何か異変が起きたのは明らかだった。次に、ガスコンの耳は近くで風切り音が鳴るのを捉えた。聞き覚えのある音だ。ガスコンはすぐに身を低くして怒鳴った。

「襲撃だ！ 気をつける！」

そう言い終わらないうちに、右隣に座っていた御者の肩を矢が貫いていた。馬車から落ちそうになった御者を座席にひっぱりあげて馬の手綱を御者のベルトに縛った。

「おい、しっかりしろ。手綱から手を離すなよ！ 絶対に止まるな」

「敵襲！ 敵襲！」

前後の馬車からも叫び声があがる。前の馬車も後ろの馬車も弓矢による攻撃を受けていた。馬車の左側の車体に矢が二本、音を立てて突き刺さった。攻撃は左手の森の中からだった。前後の馬車の用心棒達は一斉に剣やダガーを抜いて馬車から飛び降りたが、どこからともなく射掛けられる矢によって次々と串刺しになって倒れてゆく。先程、四、五人殺した事があると話していた若者は、怯えたような奇声を上げながら腰に差したショートソードを抜いた。

「おい、よせ！」

ガスコンの制止の声も聞かず、馬車から飛び降りようとした若者は、あっけなく胸のど真ん中に矢を受けて積荷の木箱の上へと倒れ伏し、ぴくりとも動かなくなった。

「慌てるな！ 敵の場所を確かめろ」

ガスコンは足元に置いてあった数本の松明を掴み、カンテラの中に突っ込んで火を灯すと、次々と森へ放り投げた。暗黒の森にオレンジ色の視野がぼんやりと広がる。弓矢の攻撃が弱まり、叫び声とともに木陰から大勢の者がこちらへ突進してくるのが見えた。抜刀した敵の刃が松明のオレンジの炎を反射して光っていた。

ガスコンは荷馬車から飛び降り、真鍮でできた柄を握り、飾り気のない黒い鞆に納められた細身のカッタスを抜くと、敵へと走り出した。同じ馬車にいたダミ声と無口な男もそれぞれの得物を抜いて敵を迎え撃った。薄闇の中、たちまち金属同士がぶつかる音ともに混乱した白兵戦がはじまった。

襲撃者は全員、黒い頭巾に黒いクロークを身に着けていた。向かってきた一人がガスコンへ細身のブロードソードを振りおろす。その一撃目をカッタスで弾き、すぐに左手で腰の短剣を抜いた。刀身に櫛のような切れ込みの入った、肉厚で頑丈な装飾のない短剣・ソードブレイカーである。敵が横ざまに振りぬく剣をソードブレイカーで受けると、目の前で大きな火花が散った。ソードブレイカーで敵の刃を封じたまま、ガスコンは大きく踏み込んで敵の胴を上から下へカッタスで切りつけた。敵の男は悲鳴をあげて仰向けに倒れる。踏み込みが足らず決定打ではなかったので、ガスコンは止めを刺すべくカッタスを構えるが、視界の左隅に刃の反射を捉え、闇雲に左手のソードブレイカーを振った。

剣に強い衝撃がぶつかる手ごたえと共に、鋭いレイピアの剣先が自分の短剣とぶつかっていた。左拳に鋭い痛みが走る。レイピアの剣先が一度ひっこむと、すぐに次の素早い刺突を繰り返されてきた。ガスコンは間合いを広くとり、敵の突きかわしながら相手を見た。黒い頭巾で顔を覆い、黒いクロークを羽織った非常に小柄な男だった。右手には金の柄と護拳がついたスウェプトヒルト・レイピアを持ち、左手には刀身が異様に細い刺突用マンゴーシュを防御用短剣として構えている。まるで左手の短剣で弓を引くような姿勢で半身

をこちらに向け、両の剣を突き出しすように構えている。

チビのくせに腕が立つな……

ガスコンはソードブレイカーを前へ突き出し、カトラスを背負うように構えて相手を牽制するが、すぐに横から新手の敵に斬りかけられ両手の剣でその刃を受ける。そのまま敵の腹へひざ蹴りを見舞って、怯んだ隙にカトラスで敵の胸を突き刺す。敵は悲鳴を上げて倒れるが、止めの一撃を加える前にまたもレイピアの小男に側面から襲われた。

多勢に無勢の上に、敵は集団戦に持ち込んできた。このままでは明らかに負けると考え、ガスコンは間合いをとり、敵へ打ち込む振りして脱兎の如く逃げ出した。馬車の近くまで後退すると、そこでは先の無口な男が敵三人を相手に斬り結んでいた。ガスコンはそのうちの一人を背中から一刀両断して、首筋と胸を何回も突き刺して止めを刺し、二人目の敵の左胸を払う。残りもう一人は負傷した仲間を抱え、森の闇へと逃れた。

「す、すまんね…… 敵も山賊にしては腕が立つ……」

男は酔っ払っているのか、ふらふらと足元がおぼつかない様子でよろけながら、礼の言葉を述べた。

「馬車が止まっちゃった。ここは頼むぞ」

「お、おう……」

ガスコンは荷馬車の御者へ下から声をかけた。

「おい、止まるな！ 急いで逃げろ」

さつき矢を受けた御者は血まみれになりながら手綱を握り、道を塞いでいる先頭の馬車を指さした。

「前の馬車が…… 御者が、やられた」

苦痛をこらえた表情で御者は言う。先頭の馬車を見ると、松明のかすかな灯りのなかで、数本の矢を受けた御者が馬車の下に転がっていた。

ガスコンは周囲を見回した。ダミ声の男は、転がった松明の近くで敵四人を相手にし、まるで狂人のように両手の短剣を振り回して



いる。斬りかかった一人の腹を短剣で突き刺し、助けに入った隣の敵の腕を切って深手を負わせたが、残り二人に斬りつけられて木の根元に倒れるのが見えた。無口な酔っ払い男が加勢せんとばかりにそこへ走っていった。

「このままじゃ皆殺しだ。俺が前の馬車を動かす。一気に突っ走るぞ」

ガスコンはそう言って細い道を塞いでいる先頭の荷馬車へと走り出した。一両目の馬車の護衛達は全滅し、敵の一人が荷馬車の手綱を手にしたところへ、背後からガスコンが襲い掛かった。ガスコンは一人を馬車から蹴り落とし、手綱を握っていたもう一人の頭をカットラスで叩き割ると、馬の手綱を取った。馬車馬の扱いなど判らなかったが、とにかく馬の尻を何度も手綱ではたくと馬はゆっくり歩き出し、しだいに走り始めた。すると森からホイッスルの音が聞こえ、それまで斬り合いを繰り返していた黒衣の襲撃者達は、負傷した仲間を連れて森の奥の方へと退却をはじめた。

た、助かったか？

ガスコン達はその隙に負傷した仲間達を荷馬車に担ぎ上げると、なんとか安全な場所まで馬車を走らせ、危機を脱する事ができた。

## アグレッサの徴税吏

雨は早朝からアグレッサの目抜き通りに敷かれた石畳を叩いていた。ウエルテ・スタックハーストの羽織る深緑色に染めた羊毛フェルトのクロークには雨水が染み込み、どんどん冷たく重くなっている。今日は珍しく、モービル街道と呼ばれる街中心部の目抜き通りでも、人や馬車の往来はまばらだった。ウエルテは止め処なく落ちてくる鼻水をよれよれのハンカチーフで何度も拭いながら、領主館の西にある徴税役場まで歩き出した。

広いモービル通りに面する徴税役場はゴシック造りの四階建ての建物で、多くの市民や近隣の農民が納税や負担に関する相談のために列を作っていた。特に農村部では生産物を貨幣に替える手段が少ないため、なんとか租税を物納で済ませようと多くの農民が鶏や豚を連れてやってくる。その処理のため、役場の一階の受け付け場は毎日大混乱だった。

そんな納税者達の列をかきわけてウエルテは建物へと入り、奥の職員の詰める広間へとやってきた。オイルランプの灯る薄暗い広間に入り、びしょ濡れのクロークと白い羽毛飾りのついたフェルト製の黒いキャバリアー・ハットを帽仕掛けに掛け、ウエルテは寒さで身震いしながら空いている椅子に腰をおろした。不意に大きくしやみとともに、鼻水が飛び出す。周囲の者がギョツとした表情でこの小柄な若い男の方を見た。風邪引きはどこでも嫌われる。なぜなら、命にかかわる流感と区別がつかないからだ。

「だ、大丈夫だ。只の風邪……」

慌てて鼻水を拭って弁解するが、皆眉間に皺を寄せて首を振った。

鼻水をすすりながら、ウエルテは今日の集金の訪問先を記した羊皮紙をなめし革の物入れから取り出した。今日は、歩いて片道二時間半かかる荘園の粉挽き場まで税の取立てに行かねばならなかった。「いよう、ウエルテ。さてはその鼻水、もしかや流感か？」

「だから風邪だつて……」

後ろから声を掛けてきたのは、同じ徴税吏見習いの同僚であるサリエリだった。太った丸顔にボサボサの頭、愛嬌のある細い目に笑みを湛えて、サリエリはウエルテの隣にドサリと座った。

「ただ、頭はガンガンだし、とても寒いんだ」

「今日はどこをまわるんだ？」

憂鬱な顔でウエルテは羊皮紙のリストを見せる。

「霞の森の方か…… お前は口バを持っていないしなあ…… 実は俺も今日、森の方へ行かなきゃならないんだ。ついでに行つて来てやろうか？」

「え、いいのか？」

ウエルテは驚いた。

「その代わり、治つたらぶどう酒を奢れよ。それにな、実は会いたい村娘がいるんだよ」

にやけて言うサリエリの言葉にウエルテは露骨に嫌な顔をした。

「やっぱり、そんなことだろうと思つた……」

サリエリはお世辞にも美男という風貌ではなかったが、人懐こい無邪気な性格のため男女問わず人気があり、特に農村部の娘達によくモテた。それはサリエリから税を取り立てられる側である農民も例外ではなく、行く先々の村で彼は歓迎された。なぜなら、彼は農民達の為に時々仕事をサボることがあり、税にからむ問題では極力相手に無理が無いよう便宜をはかつてやるが多かった。領主による重税に苦しむこの領内では、とても大切なことだった。

「とにかく、今日はゆっくり寝て早く風邪を治せ。ぶどう酒が楽しみにしとくぞ」

そう言つてサリエリは羊皮紙を懷のポケットへしまつと、鼻歌を歌いながら、クロークと帽子を手に部屋を後にした。

今日の仕事が無くなつたので、ウエルテは周囲の同僚達に声を掛け、クロークを羽織つて外へと出た。

ウエルテは極力冷たい雨に当たらないよう小走りで、モービル街道

と呼ばれる大通りを南へ下る。アグレッツサ城から南へしばらく歩くと左手に大きな鐘楼を持った教会が見えてくる。教会の左手には大きな石畳の広場があり週に二度、大市が立つ場所だ。ウエルテは広場を突っ切って東へと向かう路地へと入った。この辺は都市の一般市民が住む居住区が多い。路地は石畳で舗装されていない為、ぬかるみと水溜りだらけだった。ウエルテは水溜りをよけながらしばらく進み、三階建ての白壁の半レンガ、半木造の建物の前で足を止めた。屋根から伸びた煙突からはうっすらと煙が昇っている。ジョッキと羊をあしらった鉄製のレリーフがかかる木のドアを押すと、室内の暖かさと来客を知らせるベルの音がウエルテを迎えた。

「おやウエルテ、いらっしやい」

バーカウンターの向うから大柄な茶色い髪の若い女、ロクサーヌがウエルテに挨拶した。相変わらずいつ見ても魅力的な女性だとウエルテは思った。はつきりした目鼻立ちや茶色のカールした長い髪、そして痩せすぎない豊満すぎない魅力的な体型は、多くの男達の人気を集めている。

「やあ、おはよう。食事に来たんだ」

今朝のカウンターには先客が居た。色白で小柄なウエルテとは対照的に、大柄で日焼けした肌は荒々しさを感じさせ銀色の髪を短く刈り込んだ男、ウエルテの剣術修行時代からの旧友であり、この居酒屋兼宿屋の女主人が誰よりも愛する傭兵のガスコン・パンタグリユエルが、椅子の上で自分の足に包帯を巻いていた。

「なんだ、戻ってなんだ。久しぶりだな」

ウエルテがひどい鼻詰まりの声で尋ねたので、ガスコンとロクサーヌは顔を見合わせた。

「もしかして流感……」

「いや、ただの風邪だから……」

ウエルテはそう言って帽子とクロークをとり、帯剣ベルトから銀の柄のレイピアを抜いて壁に立てかけた。

「温かいものをくれる？」

「今、芋のスープを温めるから待ってて」

ロクサー又はそう言ってカウンターの奥にある厨房へと下がった。

ウエルテはカウンターの椅子に腰掛けた。

「用心棒の仕事はどう？　今回も無事に済んだみたいだな」

冗談じゃないとガスコンは首を振った。

「確かに大きなケガはしなくて済んだが、二十人いた護衛のうち七人が死んで、四人が瀕死だ。こんな酷い仕事は初めてだぜ」

ガスコンは、今朝依頼主の蔵まで無事に密輸品を運び込んだ事、そして瀕死の重傷者達を床屋（大昔、床屋は医者を兼務していた）へ担ぎ込んだ事などをウエルテに話して聞かせた。

「だから、抜け荷の護衛はヤバイからよせって言っただ。それにしても、盗賊も怖いなあ。大損害じゃないか」

ウエルテは鼻をすすりながら感心したように言った。

「のん気な事言いやがって。こっちは危うく死にかけたんだぞ。だけどな……」

「ん？」

ガスコンは木製のコップに注がれたエールを一飲みした。

「なんとなくなんだが、襲ってきた奴等、盗賊らしくねえんだよ……」

「らしくないって、何が？」

「山賊どもの持っいい加減さっーか……　うまく言えねえけど、武器にしても剣さばきにしても、妙に落ち着いていやがる。戦場で正規の騎士や兵隊とやり合った時みたいだ」

ウエルテはハンカチで鼻を拭いながら返す。

「でも今更、盗賊に身を落とす騎士や兵隊なんて珍しくないだろ」  
ガスコンは左手の甲にできた裂傷にすり潰した薬草を当てながら首を振った。

「そうなんだけど……　やつらは皆、正規の剣術訓練を受けた野郎ばかりだったんだ。この傷だってやたら剣筋の素早い小僧にレイピアでやられた」

「レイピアか…… それは確かに珍しい」

レイピアは多くの一般市民が腰に差した護身用の細い剣だ。いざ実戦をという場では兵士の予備の武器として位置付けられ、攻撃用武器の主力として用いられることは少なかった。盗賊のようにはじめから戦いを想定するのであれば、歩兵用の両刃剣であるショートソードやブロードソード、もしくは船乗りや海兵が好んで使う片刃のカットラスといった、より丈夫な種類の剣を使うほうが自然だった。厨房からロクサーヌがジャガイモを煮込んだスープと硬い黒パンを持ってきた。ウェルテは木のスプーンで、湯気の立つ白いどろどろのスープをすくい、口に含む。塩味ともつさりとした芋の甘味が口内に広がった。

「きつと僕らみたいな奴が山賊になったんだよ」

硬く乾燥した黒パンをちぎりながら、ウェルテはそう言っただけで自分達の剣術修行時代を思い出していた。

ウェルテは、アグレッサの北東に位置する商業都市プラムベリーの出身だった。街で公証人を勤める父親のもとに生まれたウェルテは、平凡な中流都市市民として育ってきた。そんな彼が一つ年上の孤児であるガスコン・パンタグリユエルと出会ったのは十三才の時だった。

当時、プラムベリー領主は自分の子女や配下の騎士達の為に、有名な武芸者であり戦術研究家でもあったレスター・ヴァンペルトを武術の指導顧問として招聘した。極めて優秀な剣士であったが非常に変わり者でもあったヴァンペルトは、騎士達の訓練の合間をみては市内に繰り出し、街の子供達相手に捧切れでチャンバラごっここの相手をしてやったり、身を守るための剣術の手ほどきをしたりして過ごしていた。ウェルテもヴァンペルトに遊び相手になってもらった子供の一人だった。元々ウェルテは昔の騎士道物語に憧れ、古い英雄譚の読み物ばかりを読んでいたので、棒きれを手にヴァンペルトにくっついて歩き、あれこれ質問ばかりしていた。

ウェルテが十三才の時、ヴァンペルトはウェルテをプラムベリー

城内にある広場へと連れて行った。そこには二人の同年代の少年がいた。一人はブロンドの髪を伸ばし、真っ白なカラーシャツに優美な半ズボンと高価なタイツを履いた、見るからに貴族然とした美少年で、急に現れたウエルテを値踏みするような目で見つめていた。もうひとりとは銀色に近い短髪のたくましい少年で、荒く織った、ほころびだらけのチュニツクを着ていた。どうみても城で剣術の稽古が受けられる身分には見えないその少年は、貴族でも農民でもなさそうなおうエルテにどう接しようか悩んでいるような顔で見つめていた。これが、ウエルテとガスコンの初めての出会いだった。

「暇な時間に息子に剣術の稽古をつけてくれと、とある貴族に頼まれたんだがな。相手が子供一人だと、どうもやりにくくてかなわん。そういうわけで三人まとめてやることにした。各々に最も必要な稽古をつけてやる」

このことについて貴族の少年はなんだかんだと文句を言っていたが、ヴァンペルトは笑いながら自分のあご鬚をなでてその声を受け流している姿を、ウエルテは昨日の事のように思い出した。

「ヴァン先生は、今どうしているかなあ……」

ウエルテはスープを飲み干すとつぶやいた。

「先生の事だ。どーせまた子供相手にチャンバラごっこでもしてんじゃないーかな。ひよつとしたら、北部の異端者達に稽古でもつけてるかもな」

ガスコンはカッタラスを鞘から抜き、血で汚れた刀身をボロ布で磨きながら言った。北部では宗教を巡る紛争が激化し、宗教的異端者に対する恐ろしい弾圧が行われているという噂話がアグレッサにまで届いていた。

「あたしも信心深いほうじゃないけどさあ、教会もえげつないことすると思うわ」

そう言ってロクサーヌがウエルテに温かい茶を渡した。

「おい！ 気をつけねーと、もし祭司にでも聞かれたらヤバイぞ」  
あわててガスコンがたしなめるが、ロクサーヌは関係ないとばかり

に首をふった。

「何言つてんの。教会のお偉いさんがこんなところに来るわけないよ。それにしても最近の救済税、ちよつと上がりぎだとは思わない、ねえウエルテ」

教会へ納める救済税はそれぞれの領主を通して宗教都市グライトの教主へと納められる。その領主の元で直接、税を取り立てるのはウエルテのような徴税吏だった。ウエルテも困惑顔でお茶をすすする。

「こつちも困つてんだよ。今年は麦も不作で価格も倍増、それなのに教会に納める救済税も倍増。今年はちよつとまずいよ。役場も取り立てに手加減してるけど、領主に対して取立て額を誤魔化すのはもう無理みたいだ。下手するとこの冬は餓死者が出るかもしれない」徴税役場も、今のまま重税が続けば大量餓死と疫病もしくは農民一揆が起こることは判っているので、あの手この手で領主へ納める額を誤魔化してきていたが、領主による締め付けは一層厳しくなり、役場の努力にも限界が訪れていた。

「そついえば、今回の抜け荷の依頼主は一体誰だったんだ？ そいつも税金払いたくなかつたんだね」

「ああ、もちろん知らされちゃいないが、荷主は間違いなくオストリツチ商会だ。盗み見た引渡し証文に、足のひよる長い怪鳥の紋が描かれてた」

「オストリツチって…… 荷車ギルドの組合長じゃないか！」

アグレッサ領内で何か物の運搬を行う場合には、必ず領内の物流を支配しているアグレッサ荷車ギルドに加盟している運搬業者に依頼しなければならなかった。そのなかでも最大の資本とシェアを誇っているのがオストリツチ商会だった。オストリツチ商会はギルドの組合長を務める豪商で、アグレッサの経済を半ば支配しているとも言われていた。その街一番の豪商が脱税の為に密輸をしていたというのだ。

「くれぐれも俺から聞いたなんて言つなよ。俺の仕事も信用が第一なんだ」



「ハハハハ、心配いらなないよ。僕みたいな下っ端に、あんな大物商人を告発するなんて無理だね」

心配するガスコンをウエルテは笑う。徴税役場で仕事をしているウエルテとしては、悪徳商人に対し本来なら怒りを感じるべきなのだが、この時代、欲深い商人達の間ではそんな事は当たり前なので、苦笑いすることしかできなかった。

「ガスコン、一層二人で山賊でもはじめようか？」

スープとパンを食べ終えたウエルテは、ふざけて言った。

「剣の腕はともかく、威圧感の無いお前の体格じゃ山賊は無理だろ。それに、見栄張ってまだそんな踵の高いブーツ履いてるのか？」

ガスコンは呆れながら、横からウエルテの底上げたブーツの踵を軽く蹴った。カウンターの奥で皿を拭いていたロクサーヌが思わず吹き出す。ウエルテが睨むと、ロクサーヌは口元をおさえながら慌てて厨房へと逃げていった。

「ところで次の仕事は決まっているのか？　いつまでここにいる？」  
ガスコンは首を振った。

「契約は今回で終わり。また仕事見つけねーと……　今回だって命懸けの仕事で、たった五十シルバの稼ぎだ」

ガスコンはそう言って皮袋からわずかばかりの銀貨を出して見せた。  
「そうか……　じゃあ僕はそろそろ帰って休むよ。もし遠くへ旅立つなら、その前に一声かけてくれ」

ウエルテはそう言くと、腰のベルトに吊るした皮袋から銅貨を数枚出してカウンターに置いた。

「ロクサーヌ、ご馳走様」

「ああ、もう帰るのかい？　お大事にね」

厨房からロクサーヌが手を振った。

ウエルテはクロークと帽子を身に着け、ロクサーヌの酒宿を出た。雨はまだ止む気配がない。ぬかるんだ泥道からモービル街道へと出ようとするとき、辻の右側から真紅のマントを羽織ったプレートメイル姿の騎士達に先導されて、黒塗りの高級四輪馬車が水を跳ね上

げながら通り過ぎ、領主館の方へと走り去った。ウエルテは馬車が撒き散らした泥と水しぶきをクロークで防ぎながらその過ぎ去る馬車を見送った。

ウエルテは悪態をつきながらも、せっかく食事で温まった体が冷えてしまう前に寢床へつくため、自分の下宿へと足を急いだ。

## 神のものと剣のもの

ウエルテの眼前を通り過ぎた黒塗りの馬車は街の中心部にある領主館 アグレッツサ城 の城門を越えて、芝の生い茂った大きな館のエントランスに止まった。すぐに館の使用人達が整列し、馬車のドアを開ける。馬車の中から、フォルス教の赤いゆったりした法衣に身を包んだ、姿勢の悪い色白の小男がサイドステップに降り立つ。館から、鮮やかな金糸に彩られた上着に半ズボンとタイツを着た、背の高いがっしりした中年の男が歩み出て、笑みを浮かべて恭しく頭を下げ笑みを浮かべた。

出向えを受けた法衣の男、宗教的権威をもってこの大陸を支配するフォルス教会の幹部聖職者であるドミニク・ホルへ祭務官は両手で印を結んでその場にいた者らを祝福した。

「ようこそ祭務官様、遠路はるばるこのアグレッツサまで、よくおいでくださいました」

出迎えた男、アグレッツサ公フランツ・ド・ゾロッソは祭務官の手を引き館の中へと促した。

アグレッツサの領主であるフランツ・ド・ゾロッソの居館であるアグレッツサ城の応接室は、館の二階南東の角にある。壁は漆喰と化粧板におおわれ、天井からは高価なシャンデリアが吊るされた、開放感と清潔感のある部屋だった。室内には安楽椅子や高価な諸外国の調度品が並び、アグレッツサの豊かさを誇示している。

白い漆喰の塗られた壁には、大きな布製の地図が掛かっていた。アグレッツサを中心に、この大陸の東側を描いた物で、周囲に多くの都市国家諸国の場所と地名、それに街道が記されている。地図の右端、すなわち日の昇る東側は大洋を示す青で塗られている。海と陸地の境界にひととき大きく名前が書いてある街が大港湾都市であるポート・フォリオである。ポート・フォリオから西の内陸平野部へは大きな街道が一本伸びている。その道はいくつかの関所を越えて

アグレッサに繋がっている。さらに道はアグレッサから南北と西へ伸びている。内陸の国や街がポート・フォリオへアクセスするには必ず、アグレッサを経由することになっていた。

一方、アグレッサから南へ伸びた街道は幾つかの関や砦、都市国家を経由してフォルス教の教主が住まう宗教都市グライトへと繋がっていた。反対に、北方に伸びた街道は幾つかの都市国家を経由して枝分かれし、北部の大穀倉地帯を納める街や村へと伸びていた。

アグレッサ公フランツは、グライトの街から訪れた教会の実力者であるホルへ祭務官をこの応接室へと招いた。二人は向かい合わせに安楽椅子に座ると、給仕係の者がすぐにガラス製の高価なグラスとデキャンターに入ったぶどう酒をもってきた。酒が注がれ、もてなしの軽食がサイドテーブルに置かれると、館の主は召使い達に退室を命じた。

ぶどう酒を一飲みし、ホルへは安楽椅子へとふんぞり返った。

「フランツ、教主様は汝の毎年変わらぬ救済税の納付に大変感銘を受け、喜んでおられる。近頃の領主どもときたら、飢饉だ干ばつだと言いつくを並べ、聖なる救済の為の出資を渋っておる。呆れ果てて二の句もつげん」

フランツは狡猾な笑みを浮かべてうなずいた。

「御意。まったく神を恐れぬ所業、この私めには理解できかねます」猫背の祭務官は椅子に深く腰掛け、横柄に足を組むと、グラスに満たされた高価なぶどう酒をグビグビと飲み干した。

「特に、教主様はまだこの大地で異端者や異教徒が、我々同様に息をして日々を過ごしている事に、大層お心を痛めておられる。近々、再度の異端討伐のための宗教令を発布されるお心積もりだが……そのためには諸国領主においては信徒全員の一層の助力が不可欠だ。

判るな？ フランツ」

「はい、私も同じ考えで御座います」

フランツは祭務官の杯にぶどう酒を注ぎたしながら同意した。

「さらに教主様は、信徒達の死後の魂の救済をより確かなものとす

る為、グライトの大聖堂の拡張工事をお考えだ」

「なんと素晴らしい。建設開始の暁にはアグレッサからも選りすぐりの大工達を派遣致します」

フォルス教の教典には本来、大聖堂の規模と魂の救済に因果関係があると記した箇所は存在しなかった。これまでに、この事実を一部聖職者や神学生が公の場で指摘してきたが、彼等は全て、教主より異端者の宣告を受け、火刑台の灰と消えていった。

「ところで、祭務官様…… 異端者の討伐にあたり、例の件に関して、教主様はいかがお考えでしょうか？」

フランツは声のトーンを落として、囁くように尋ねた。祭務官はワインを満たしたグラスを揺らしながら壁に掛けられた大きな地図へと目をやる。

「判っておる…… 教主様は、善きに計らえと仰せだ。事が万事済んだ後、教主様は汝の行動を正当と宣言され、追認なさるそうだ」

祭務官はそう言つて、地図の上部に位置するある都市国家の地名を見つめた。それは広い穀倉地帯と北部の山地を領土として有する都市国家で、良質な小麦の産地として有名なグレイプスの街だった。

「グレイプス公め…… 凶作の為とうそぶき、今年は救済税を教会規定の半分しかグライトへ送つてよさなかった。それだけでも許されないというに、あの領主は北部に逃れた異端どもを討伐するよう命令を下しても、従うどころか異端者に居住権を与え保護しているというではないか。この事には教主様も大層お怒りだ」

酒のせいかな、ホルへはだいぶ饒舌になってきた。

「フランツ、準備の方はどうなつておる？ もしも失敗すればお前だけではなく、この私まで窮地に立たされる事になる」

アグレッサ公は男爵ひげをひきつらせて、笑った。

「ご心配には及びません。手筈は整っております。グレイプスは間もなく収穫の時期を迎え、祭りの準備が始まっています。我々はあゝる旅芸人の一座を雇いました。我が精鋭の兵士や騎士達をその芸人の一座に紛れ込ませてグレイプスの街中へ送り込みます。祭りの間

は、市民だけではなく警備の騎士達も浮かれ騒ぎ、防備は手薄になります。その隙に我が兵士達が城門や市門を押さえ、街の付近に潜ませていた本隊を城内に引き入れてグレイプス公を倒す計画です。その直後、私が直々にグレイプスへ赴き、神の名においての天誅をなした事を宣言いたします」

フランツの説明に、祭務官はうなずいた。

「あの街の軍は決して強力ではないが、グレイプスは非常に豊かな街だ。それに騎士達の結束は固いと聞く。油断してかかるでないぞ」

「ご心配には及びません。商人にアーロンの街から最新の武器を取り寄せさせました。準備は最終段階に入っております」

フランツは地図を指さしながら言った。

「グレイプスを攻略した暁にはホルへ様を通して、教会へ今の三倍の救済税をお納め致します。さすれば教会の次期祭務長の座もホルへ様の手に……」

フランツの言葉を祭務官は咳をして打ち消した。

「フランツ、声が大きいぞ」

「これは失礼を致しました」

その時、オークでできたドアがコツコツと音を立てた。フランツが入室を命じると、背の高い痩せた男、アグレッツサ城で領内の事務・管理を一手に担う家令のジョバンニ・ペレスが入ってきた。

「旦那様、ガイヤール騎士隊長が至急ご報告したい事があると、参っております」

「わかった、すぐ行く。祭務官様に新しいぶどう酒をお持ちしろ」  
フランツは家令にそう命じて席を立った。

## 友の死

暑くて目が覚めた。寝間着は汗でびしょ濡れだった。ウエルテは寝台から身を起こし、板張りの床に足をついた。窓にはめた鎧戸の隙間からかすかな光がもれていた。まだ夜にはなっていないようだ。立ち上がると、体は軽く、頭痛も感じない。鼻水だけは相変わらず落ちてくる。風邪はほぼ回復したようだった。寝間着を脱ぎ捨て、洗濯し虫がつかないように煙でいぶした白い木綿シャツとズボン、厚手の毛織物の上着を着て、その上から剣帯を腰に巻く。衣装箱に立てかけたレイピアと十字型のマンガーシュを剣帯に差した。街中では、護身の為にレイピアやスモールソード、短剣など、最低限の武器の携帯は認められていた。

ウエルテはキャバリアー・ハットを手にとると、汗で濡れた寝間着を抱えて階下へと降りた。一階の厨房では大家のおばさんが夕食の準備にとりかかっていた。

「もう動いて大丈夫なのかい？」

「お蔭さまで。洗濯物置いときます」

そう言つてウエルテは洗濯用の樽に寝間着を放り込み、外へと出た。雨はもう止んでいた。泥と水溜りだらけの細い路地を縫つて、大通りへと向かった。石畳の街道は、東西南北から集まった荷馬車の列や行商人の往来で一杯だ。広場では小売専門の商人達によつて仮設の市が開かれ、東西南北の文物と人々でごったがえしていた。

人波をかきわけ、ウエルテは今朝訪れた徴税役場の前へと再びやってきた。朝にも増して、役場の前には多くの農民や職工達が詰め掛けている。応対するカウンターは戦場さながらだ。

「お役人様、お役人様、今年の小麦はみんなイナゴにやられちゃいました。替わりにオート麦と子豚一匹でなんとか手え打ってくださいらんでしょうか？」

「うわあああ、判つたから、と、とにかく子豚をカウンターにのせ

ないで！」

一方、その隣では。

「俺の織ったこの上物タペストリーじゃあ足りねえなんて、あんた。さては、金勘定はできても品物には目が利かねえな？」

「なら、これを裏の両替商が質屋に持つていけば金に替えてくれますよ。どうします？　これ、ギルドを通しては売ってはいけないキズモノでしょ？　連中がここの査定以上で買い取るとは思えませんかね」

役場の職員と納税者達の攻防が行われている横を通り抜け、ウエルテは広間へと入っていった。

広間では同僚達が、現金や物納された穀物や毛織物の仕分けや徴税目録の乗った貢租簿を整理に追われていた。ウエルテは自分の代わりに出掛けていったサリエリを探したが、広間には見当たらなかった。ウエルテは近くで銀貨の枚数を数えている同僚にたずねた。

「あの、サリエリは見ませんでしたか？」

「いいや、朝から見てないな」

ウエルテは首を傾げた。日没までもうそんなに時間がない。それにサリエリは自前のロバを持っている筈なので、ウエルテよりもずつと速く移動できるはずだ。ウエルテは、サリエリが村娘と遊んでくると話していたことを思い出したが、それを差し引いても遅すぎた。ウエルテは、部屋の奥で計算尺を手に指示をとばしている老人のもとへ行った。

「反物は今日中に商人の所で貨幣に換えてくるように。交換手数料は七分までだぞ。それ以上は絶対に払ってはいかん。次！　なににな、ヒヨコが七羽生まれたのか？　たしか、この農家は滞納分も含めて五割徴収だ。三匹と半分のヒヨコを受け取るように、次！」

「先生、は、半分って……」

白髪交じりの髪を辮髪にして黒いリボンで結び、眉間に鼻眼鏡をのせた、痩せた老人は、驚異的な事務処理能力で部下達の質問に答えてゆく。老人の名はルイス・アカバス博士。アグレッサの徴税代



官として、領主の為に日々領民から租税を搾り取る職務の責任者だった。

「ん？……確かにヒヨコを半分にはできんな。ええと、雌鶏の卵を週に三個づつ十週間納めるように、次！」

ただ、代官という職務にも関わらず、アカバスは慈悲深い感性と非常に合理的な頭脳の持ち主だった為、領内が不況の時には課税額の見積もりを甘くしたり、取立ての際にわざと鯖を読んで物品を徴収し市民や農民を助けたりしていた。それ故、役場で働く者や市民は尊敬の念をこめて彼を先生と呼んでいた。

「あの先生、実はサリエリの件で……」

羽根ペンをインク壺に突っ込んだところでアカバス博士の手が止まった。

「スタックハースト、一体サリエリがどうした？」

ウェルテは、自分が風邪を引いたこと、サリエリが仕事を代わってくれたこと、その彼がまだ戻ってきていないことを手短に話す。アカバスは羊皮紙の束に視線を戻し、急いで羽ペンを動かしはじめた。「サリエリめ、またサボりか……　こんどガツンと言ってやらねばならん。事情は判った。とにかく、お前は風邪を治すように。今日はもう帰ってよろしい。次！」

ウェルテはアカバスに礼を言っ下宿へ帰ろうとした時、広間の同僚達がざわめき、部屋の入口を凝視した。

深みのある青いクロークと、青い羽飾りをのせた黒い三角帽を身に着けた男達が広間に入ってきた。どの街でも、三角帽は上級の役人や領主の家来達の正装として用いられている事が多かったが、ここアグレッツサでは、青い羽飾りのついた三角帽には特別な意味があった。入ってきた男達はこの街の警察権を持っていることを示す為に、櫛でできた長い警杖が握っている。その服装から通称　青騎士隊　と呼ばれ恐れられる、領主お抱えの軍事組織だった。

「ルイス・アカバス博士ですね？」

先頭の筋肉質の男が野太い声で聞いた。

「いかにも…… 青騎士隊が一体何の御用かな？」

アカバスは眼鏡を直しながら相手を睨みつけた。

「確認して頂きたいことがあります。外まで、ご足労願えますか？」  
男は威圧的にアカバスを見下ろした。

「先程、霞の森の入口で男が刺されて死んでいるを見つけました。持ち物や容貌から、もしや徴税役場で働く者かもしれないと……」

ようやくアカバスは、羽根ペンをスタンドに挿して立ち上がり、自分の三角帽を頭にのせた。隣で話を聞いていたウエルテも嫌な予感に襲われ、青騎士達の後について役場から飛び出した。

役場の前には、青騎士隊の男達に囲まれた一台の荷馬車が止まっていた。アカバスが荷台の側によって、遺体にかぶせられていたクロークを持ち上げた。アカバスはため息をつき、肩を落とした。

「先生……」

ウエルテが背後から声にならない声を発すると、アカバスは振り向きゆっくりうなずいた。ウエルテが馬車の荷台を覗き込むと、そこでは真つ白な顔をしたサリエリが眠るように横たわっていた。

その夜、ウエルテは、アカバス博士やサリエリと特に親しかった役場の同僚数人と共に、サリエリの自宅へ弔問へと赴いた。すでに雇われた触れ役達が街中を走り回りながら、サリエリの死と葬儀の時間、場所を告知していた。

アグレッツサ城に近い、街の東側にサリエリの実家はあった。サリエリの一家は、五階建ての集合家屋の、二階と三階で暮らしていた。すでに玄関には黒い垂れ幕が掛けられ、その家に不幸があつたことを知らせている。アカバスを先頭にウエルテ達は垂れ幕をくぐつて家へと入っていった。二階広間の中央には榆の木で作った棺が置かれ、祭服を着た教会の僧侶が二人、死者の旅立ちの準備を進めていた。

アカバスは、部屋の隅に控えているサリエリの両親や兄弟達に挨

拶の言葉を述べ、父親の手を両手で握り締めた。ウエルテは棺の横に立ち、サリエリの顔を見つめた。今朝会った時より青ざめているが、普段と変わらぬ丸顔の優しそうな顔で眠っていた。ウエルテは今朝の、サリエリの親切心を思い出し、顔を歪めた。

「ぶどう酒は欲しくないのか？ サリエリ……」

そう言つてウエルテは手袋を取った手でサリエリの額をなでた。手にひんやりと冷たい感触が伝わってくる。ウエルテに同僚の死を実感させるのは、その亡骸の冷たさだけだった。

「なんでお前がこんな目に……」

僕の為に、こんな事になつて…… すまないな……

はるばるプラムベリーからやってきた異邦人であるウエルテに、同僚としていろいろ手伝ってくれたのがサリエリだった。未だサリエリの死に現実感が沸いてこず、ウエルテは涙を流すような心境にはならなかった。同僚からだけでなく、農民や商店主からも慕われていたサリエリに敵がいたとはとうてい考えられない。

棺の方へアカバスがやってきてウエルテに、遺族への挨拶をするよう促した。ウエルテは棺を離れ、サリエリの両親のもとへ行き言葉かけた。

「こんなことになつて、言葉ありません…… それも今日に限つて……」

ウエルテはそう言つてサリエリが自分の仕事も引き受けてくれたいきさつを、サリエリの家族達へ話して聞かせた。

「誰がこんな恐ろしい真似をしたのか全く判りません。なんで、サリエリに限つて……」

すると彼の父親がうなずきながら棺の方を見た。

「お金を扱う仕事だから、多少の危険は仕方ないと倅はいつも言っていました。ただ実際にこの場になつてみると…… なんとも、やりきれない……」

すると隣で俯いていた母親も目の涙を拭いながら言つた。

「これも神様の思し召しだと思つて、今はただ、あの子の魂の平安

を願う……ばかり……」

そこまで言いかけて、とうとう母親はその場で泣き崩れてしまった。ウエルテはあわてて崩れ落ちる母親を、父親と一緒に腕をとって支え、近親者達が彼女を介抱するために部屋の外へと連れて行った。

挨拶を終え、ウエルテ達はサリエリの実家を後にした。帰り道、火の灯ったオイル・カンテラをぶら下げて真つ暗な街路を先導していたウエルテに、後ろからアカバスが声をかけた。

「スタックハースト、お前、確か今日はどこまわる予定だった？」

「霞の森にあるエルベ莊園の粉引き場とバルテルミ村の村長の家です」

本来、ウエルテが今日取立てに廻るべき場所で、サリエリに代理を頼んだ場所だった。

「そうか……」

アカバスはそう一言だけ返事をして黙ってしまった。

「あの、先生。サリエリはどこをまわる日だったんですか？ それに、青騎士達はサリエリを見つけた様子について、なんと説明してくれたんですか？」

「方向はお前と同じく霞の森の方だ。騎士どもが言うには、バルテルミ村へ行く道ではなく、アイアン街道に近い、森の手前の路地に入ったところで胸を一突きされて倒れていたそうだ」

アイアン街道とは、西のデルブレー山脈の麓にあるノックス砦へと続く、霞の森を横切る通商路で、山脈の向うにある工業都市から主に金属製品を運んでくる道である。

「遺体を見た床屋や坊主に尋ねたら、やや幅広の刃物で一突きにされていたという。着衣に乱れはなかったが、集金したはずの金は持っていなかった。皮袋ごと持ち去られたようだ」

「ロバはどうになりました？ サリエリはロバに乗って行ったはずですよ」

アカバスはうなずいた。

「忠実なそのロバは、主人のそばで草を食んでいた。騎士どもがも

う両親に引き渡している」

ウエルテは、他にサリエリの持ち物で盗られた物がないか尋ねると、アカバスは首を振る。

「着衣に乱れは少なく、筆記具や剣もそのままだったそうだ。剣で賊と斬り結んだ形跡もない」

ウエルテは怪訝な顔でアカバスの顔を覗き込む。

「盗賊なら身ぐるみ剥がしてゆくはずです。金だけ盗って、剣も服も口バにも手をつけないなんて、そんな盗賊いるでしょうか？」

アカバスはウエルテに顔を向けずに言った。

「青騎士の蹄の音でも耳にして、急いで立ち去ったのだろう……」

とにかく、我々の仕事には危険が多い。集金後は特にだ。スタックハーストも十分に注意しろ。しばらく霞の森には行かなくていい」アカバスはそう言って、広場で徴税役場の一団を解散した。アカバスや同僚達は各々自分のカンテラに灯を入れ、真つ暗な街路へと散っていった。

翌朝、アグレッサの天井は灰色の雲におおわれていた。時々、小雨が落ちるなか、街の北側、市門を出た野原にある墓地でサリエリの葬儀は行われた。榆の木でできた棺の前には赤いローブ状の祭服を着た教会の僧侶が教典を手に祈りの言葉を吟じる。

「彼は、職務に忠実でした。そして、職務を通じて触れ合う全ての人々に対して、誠実に、そして愛をもって接しました。何故彼のような者がこんなにも早く、天に召されるのか？ 残された者達の……」

多くの会葬者が僧侶と棺を取り囲むようにして、黒い喪服もしくは喪章を身につけて立っていた。市民や徴税役場の関係者、そしてはるばる市外の莊園や農村からやってきた農民の姿も見える。会葬者の片隅で、ウエルテはサリエリに最後の別れを告げるために帽子をとって僧侶の声に耳を傾けた。

一体、お前に何があつたんだ……

「それには、我々には到底推し量る事が出来ない、天の御意志があるのです。彼の魂は我々より一足早く、救済への階段をのぼりはじめました。彼の旅が平安である事を祈りましょう」

祈りが終わる、棺がゆつくりと墓穴の中へと下ろされていった。彼の親族がそこへ土をかけてゆく。

さよなら、サリエリ。もう、僕には何もしてやれないが、もし仇とめぐり合う幸運に恵まれる事があつたら、その時は必ず剣を抜くよ……

ウエルテは棺に誓って腰のレイピアの柄を握んだ。

## ウィングレットの田舎貴族

友人の旅立ちを見送り、ウエルテは朝食をとるためにロクサーヌの酒宿を訪れた。

「おはよう、風邪はもういいのかい？」

ロクサーヌがカウンターの向うから言った。

「おかげさまで…… 朝ごはんお願い」

ウエルテはクロークと帽子をとって近くのテーブル席へと腰をおろした。

カウンターにはエールの入ったコップを傾けているガスコンがいた。今日は仕事がないようで、いつも身に着けているチョッキのような袖なしの革の鎧ではなく、シャツの上にチュニックだけの軽装だった。

「やつぱりお前も葬式だったのか」

ウエルテの左腕に巻いてある喪章を見て、ガスコンが言った。ウエルテはうなずき、腕に巻いていた黒いリボンを解く。

「話は触れ役から聞いた。親しかったのか？」

ウエルテはうなずいた。

「この街へ来た時、とても世話になった……」

ロクサーヌが食事を持ってやってきた。硬いバトルと干し肉のシチューだった。バトルを細かく千切り、あめ色のスープに浸して口へと運ぶ。ウエルテは黙々と食事を済ませ

せ茶を飲み干し、ロクサーヌへ食器を返した。

「なあガスコン、昨日、盗賊に襲われたと言っていたよな？」

「ああ、霞の森の抜け道だな」

ウエルテは唇を噛んだ。

「普通、盗賊って身包み剥いで持つてくと聞いているけど、実際はどんな連中なんだ？」

「俺も数回しかやり合っていないから判かんねーよ。ただ普通は、足

が付きそうな品以外は根こそぎだろう。……その気の毒な仲間っていうのは、盗賊にやられたのか？」

「昨日、霞の森で。役場の上司はそう言ってた。それに青騎士隊も盗賊の仕業と考えているって……ただ、盗まれたのは金だけで、乗ってた口バも、剣も服も手付かずだった」

それを聞いたガスコンはしかめ面になった。

「何だそりゃ？ よつぽど金に余裕のある盗賊だな」

カウンターにいたロクサー又は思わず笑う。

「あんた、金があるのに盗賊なんてやる馬鹿な人いるの？」

ガスコンは舌打ちした。

「だろ？ つまりそんな仕事する奴は盗賊じゃねーんだよ」

黙って聞いていたウエルテはうんうんとうなずいた。

「そっか……判った。とりあえず僕は霞の森まで行って来る。そいつが昨日回ったところへ行ってみようと思うんだ」

ウエルテはクロークを羽織りながら言った。

「おい、一人でか？ 森は危ないぞ。このエールを飲んじまったら俺もついてくぜ」

「お守り役なんかいらないよ。それに、久々なんだろう？ ロクサー又と一緒に居てやれよ」

「ちよつと、何言うのさ。冗談もいい加減にしてよ」

ロクサー又が赤くなつて叫ぶ。

ウエルテはそんな声を背にドアに手をかけようとすると、外からドアが押し開けられ、異様なシルエットの人影が酒宿の入口に姿を見せた。今朝からずっと沈鬱な表情だったウエルテの顔が、思わず怪訝の色を湛えて歪む。ガスコンとロクサー又もその来訪者の姿を認め、眉間に皺を寄せた。

「おや、誰かと思えば、我が友たちではあるまいか」

来訪者は、鼻にかかった声とゆっくりとした語調でウエルテ達に挨拶した。

開け放たれた木のドアの外に立っているその男は、光沢のある絹



でできた群青色のクロークをはためかせて、酒宿へ入ってきた。ピカピカに磨かれた漆黒の乗馬ブーツにビロードのキュロットを履いた長い脚を納めている。男は酒宿の中を優雅な仕草で見回した。輝くばかりのブロンドの長髪は帽子の隙間から肩にかかり、白く端正なつくりの顔には品良く整えられたカイズェル髭を生やしている。だが、室内の三人が驚かせたのは、その奇抜な服装以上に奇怪なこの客人の頭のせいだった。フェルトでできた紫のツバ広帽子の上には、これでもかというくらい銀色の羽毛飾り付けられ、反り返ったツバの周囲には白いレース生地が縫いこまれている。そして、頭頂部にはオレンジやリング、ブドウを盛ったフルーツバスケットがのっかっていた。

「お、お前、そのなりはなんだ？」

我に返ったガスコンが唾を飛ばしながら叫ぶ。奇妙な客人は澄んだ青い双眸で退屈そうな眼差しを送りながら、高価なクロークから雨垂れの粒を払った。

「相変わらず礼儀を知らぬな、パンタグリュエル。スタックハーストも久しぶりではないか」

そう言つてクロークを脱いだ客人は両手で帽子をとり、近くのテーブルに置いた。ゴトンと音がしたところを見るに、相当重い帽子のようだ。エリマキトカゲのようなひだ襟を着け、金糸を縫いこんだ白いフリルだらけのジャケットを着た客人はテーブル席についた。

「お久しぶりね、ナイジェル卿。とりあえず、ようこそいらっしやいました」

ロクサーヌは芝居がかった仕草でスカートの両すそをつまんで会釈した。

「うんうん、ロクサーヌ。そなたはいつ見ても美しい。前にも言ったが、そなたさえ了解してくれたら、私はいつでもそなたを第二夫人候補か第三夫人候補に迎えるところなのだが……」

「あーら、光栄ですこと。でもあいにく、あたしには心に決めた人がいるので、他を当たってくださいませ」

ロクサー又はそう言ってこれ見よがしにガスコンの肩に抱きついて見せた。この二人は会う度にいつも同じ言葉の応酬を繰り返してきたので、ガスコンは完全に無視を決め込んでいる。

「そうか、実に残念だ……」

ナイジェルと呼ばれた男は舞台俳優のように掌を額に当てて嘆いてみせた。

この奇妙な風体の男、ナイジェル・サーペンタインはプラムベリーの街に程近いウイングレットの莊園領主の息子で、かつてプラムベリー城内でウエルテやガスコンと共に剣豪ヴァンペルトから剣術の手ほどきを受けた仲間であつた。ちなみに、この男の第一夫人候補は彼の父親であるウイングレット伯が決める事になっているが、それは未だ空席ままである。その為、彼が外で心惹かれる女性は、全て第二夫人か第三夫人候補となるのだが、その座が埋まつたという話はまだない。

「ところでウエルテ・スタックハースト、さつきから黙って私を見ているが、そんなに私の姿に魅了されたのか？」

呆れて言葉も出ないウエルテにナイジェルが尋ねると、すかさずガスコンが怒鳴る。

「んな訳ねーだろ！ その馬鹿げた格好に度肝抜かれてるんだよ！それに、その果物屋の看板みたいな帽子は何のつもりだ！」

非常識なその格好は街中でも目立つ事間違いない。

「無礼者！ これだから風流を解さぬ田舎者は困る。この帽子も上着も、エスカルの街で今もつとも流行りの仕立て屋に作らせた物なのだぞ」

エスカルの街はアグレッツサの南、宗教都市グライトに近い被服産業の盛んな街で、流行の発信地としても名高い。ただ、その街の権威ある仕立て屋達の傑作が一般市民層によく理解されているかという、それは非常に怪しい。

ウエルテは古いなじみ乱入に苦笑いを浮かべた。この朝初めて浮かべた笑みだつた。

「変わらないなナイジェル…… 来たばっかで悪いけど、仕事だからこれで。時間があつたらまた」

「おい、待てよウエルテ」

ガスコンの呼びかけにも応ぜず、ウエルテはそう言つて帽子をかぶると酒宿を後にした。

「あーあ、行つちまつた…… それはそうと、お前一体何しに来たんだ？」

「エスカルやグライトで開かれていた大市を巡っていたのだ。たまたまアグレッサにも用ができたので寄つたまでのこと。だが、ウエルテもお前もどうもせわしない。これだから平民は余裕が無くてつまらん」

ナイジェルはそう言つて椅子に腰掛けた。

「ところで、今、城門の前で赤い上着を着た騎士達を見たが、どうやら私と同じようにグライトから教会の幹部が訪れているようだね」

グライトに駐屯するフォルス教会の教会騎士団達はいつも、磨きぬかれたプレートメイルの上から赤いサーコートとマントを羽織つて、教会の上級聖職者達の護衛についている。赤い衣をまとった騎士達がいるという事は、そこに教会の実力者がいる事を意味していた。

「だから、いつも教会がらみの愚痴には気を付けろつて言つてんだ！」

ガスコンは昨日ロクサーヌの愚痴を思い出し、思わず彼女を怒鳴りつけた。

「しょうがないだろう？ 文句の一つも言いたいくらいこつちも力ツカツなんだよ」

ロクサーヌは口を尖らせる。

「確かに聖職者には、盗賊やごうつく領主以上に注意しなければならんな。彼等こそ、神を使ったギルド顔負けの商人集団だ」

ナイジェルはそう言つて上着の内ポケットから細長い煙管を取り出し、ロクサーヌに炭火を分けてくれるよう頼んだ。 新世界 と呼

ばれる海を越えた大陸で栽培される特別な薬草を乾燥させ、みじん切りにして管に詰め、そこに火を付ける。すると、やたらと臭う煙が管から周囲に撒き散らされる。それを一生懸命に吸い込み、一時的に軽い陶酔状態を味わう娯楽が生まれていた。まだまだこの大陸では一般的ではかったが、この遊びは一部の貴族や商人達の間で少しずつ流行り始めていた。

「まあた、お香を吸ってる。新世界って妙な物が多いのねえ。一度どんなところか行ってみたいわ」

ロクサー又は興味深そうにナイジェルの火遊びを眺めていた。一方、ガスコンは鼻をつまんで激しく咳き込む。ガスコンとウエルテは以前から、ナイジェルの撒き散らすこの「お香」の刺激臭が大嫌いだった。

「いい加減にしろ。表でやれ！ 喉が……ゲホゲホッ、満足にエールも飲めねえ！」

ナイジェルは煙を一吹きすると、ため息をついた。

「嘆かわしい…… パンタグリユエル、お前は本当に風流の判らぬ男だ…… それに、こんな時間に酒を飲んでいるところを見るに、さては職にあぶれているな？」

ナイジェルはそう言ってガスコンに煙を吹きかけた。

「よせて！ ゴホッゴホッ…… 戦が無いんだからしょうがねえだろ！」

「傭兵なんて、損な仕事を選ぶからだ。だが、心配せずとも戦ならもう間もなく始まりそうだ。グライトでは教会が異端討伐軍を組織する為、兵隊を集めていた。それを聞きつけて、あちらこちらから荒くれどもが集まって来ていたぞ。お前も行ってみてはどうだ？」

ガスコンは禁句を聞いたような表情で手を振った。

「そいつはご免だな。教会の絡む戦は、相手はなから人間扱いされてねえから戦い方も滅茶苦茶なんだよ。戦の誉れなんかありやしねえ。でも、百歩譲って戦闘自体はお互い様だからまだいい。だが、終わった後の殺戮、暴行、略奪の乱痴気騒ぎには歯止めが利かねえ。

日頃取り澄ましている貴族や騎士、果てには教会の坊主までもがモンスターみたいになっちまう」

それを聞いてナイジェルは笑った。

「そもそも、殺し合いには誉れどころか、道理も無法もあるまい。『道理に沿った殺し』など、それこそ異端討伐軍付き祭司の言いそうなこと」

若い貴族は暖炉の前で、煙管から灰を落とすと、それを元あったポケットへとしまう。

「さて、そろそろ失礼しよう。今日はまたも辛い失恋もしてしまったので、このわびしさはアグレッサの町娘達に癒してもらおうとしよう」

そう言つてナイジェルは気前良く1ゴールド金貨をテーブルに置いて立ち上がった。

「二、三日はアグレッサにいるつもりだ。時が許せばまた会おう」  
ナイジェルはクロークを着て、派手な帽子を頭にのせた。

「あーら、今日はお早いね？　ところで、お泊りはどちら？　なんなら上の部屋空けときますよ」

ロクサーヌが、テーブルの上の金貨に目を奪われながら尋ねた。

「申し出には感謝しよう、愛しのロクサーヌ。たしかにアグレッサでここほど清潔な宿はないからな。だが、今回はアドリアーノ・オストリツチの家に滞在する事になっている。なんでもあの商人、近々面白い物が手に入るから見に来て欲しいとエスカルまで手紙を寄越してきたのだ」

オストリツチという名を聞いてガスコンは顔を引きつらせた。

「さらば、友らよ……」

ドアが閉まると、ロクサーヌは金貨を握り締めて軽やかに体を一回転させた。

「やったー、ねえガスコン、肉屋で牛肉でも買って、今夜あたりシチューにしない？」

そんなロクサーヌの声も遠く、ナイジェルが去った後、ガスコンは

炭酸の抜けきつたエールのコップを置き、難しい顔をして腕を組んだ。

「アドリアーノ・オストリッチ……」

よりにもよって、つい昨日自分が汚れ仕事を請け負ったばかりのオストリッチ商会と、その当主に会いに来たという古いなじみ……

ガスコンは口をあけたまま齒軋りした。昔から治らない、無意識に出る悪い癖だった。十代の頃から戦場で培ってきた、自分の動物的勘が厄介事の前触れを伝えている証だった。

## エルベ莊園

ウエルテはアグレッサの西門をくぐり、石敷のアイアン街道を西へと急いでいた。アグレッサの街は平野部の真ん中にあり、町の周囲は草原となつてゐる。遠くには羊の群れを追ひ立てる牧童や、収穫直前の麦畑を見て廻る農夫の姿が見えた。アイアン街道はその平原の真ん中をまっすぐ西へ向かつて伸びてゐた。

サリエリは昨日、ほとんど同じ時間にここを通つて森へと向かつてたはずだった。歩みを進めながら、ウエルテはサリエリと初めて会つた時の事を思い出した。

読み書きとソロバンができたウエルテがアグレッサの徴税役場で見習い兼下働きの仕事を得たのは二年前の事だ。

「よう！ プラムベリーから来たんだつて？ あそこはアグレッサより暖かくていい所なんだつてな？」

そう人好きのする笑顔で気さくに話し掛けてきたのがサリエリだった。もう住む場所は決まつてゐるのか？と問うサリエリにウエルテは町の北側にある下宿屋にしようかと思つてゐると応えた。

「やめとけ、やめとけ。盛り場に近すぎる。酒を飲みに行くには近くていいけど、あの辺は夜中も騒がしいし。ならず者も多い。それに、あの界限はネズミやシラミが多い地区だ。下手な部屋に入つたら大変だぞ」

それを聞いたウエルテはさぞ青い顔をしてゐたのだろう。サリエリは大きく笑いながら言つた。

「心配すんなつて。もっといい、きれいな部屋を紹介してやるよ」そしてサリエリは、街の西側にある住宅街にある、こじんまりとはしているが瀟洒な下宿を紹介してくれた。実際そこは、清潔で日当たりも悪くない、手ごろな宿賃で生活できる部屋だった。以来、ウエルテはそこから役場へと通つてゐる。

その後もサリエリは、ウエルテになにかと世話を焼き、ウエルテ

はアグレッサでの生活にすぐに慣れることができた。仕事の外回り先で一緒にサボって昼寝をしたり、時には酒を飲み、酔っ払って下手くそな詩を吟じて酒場の笑いものになったり、調子にのってハマった賭けすごろくで危うく破産寸前になったりと、くだらないが非常に楽しかった思い出がウエルテの脳裏に蘇ってくる。

ウエルテから見ても、そんなサリエリに恨みを抱く人物がいたようには思えなかった。顔に似合わず農村の娘に良くもてていたのは、ウエルテも知っていたが、そのせいで恨みを抱かれたりトラブルになったという話も聞いたことが無い。むしろ、その手の愚にもつかないトラブルはナイジェルが一、二度もちこんできたことがあったが……

一方で、もし怨恨ではなく、通りすがりの場当たり盗賊にやられたのだとすれば、それはそれでやりきれない事だ。確かに盗賊はアグレッサに限らずどこにでもはびこっている。事実、ガスコンも同じ日に霞の森で襲撃を受けたくらいだ。森の中には複数の盗賊団が潜んでいるとも言われていた。サリエリは不運にも、その凶悪な盗賊に出くわしてしまったのだろうか。そこまで想像し、ウエルテは急に怒りが吹き上がってくるのを感じていた。

ウエルテは、昨日からサリエリの足跡を辿る事にしようと決めていた。そうすれば、今はまだ全く判らない事件の一端が自分にも理解できるかもしれないと思ったからだ。その為に、今日は日の昇る前に起き出し、レイピアとマンゴーシュの刃を入念に研ぎ、油を引いておいた。ウエルテは決して粗暴でも、好戦的な性格でもなかったが、その腕に覚えが無いわけではないし、以前に友人の持ち込んだトラブルに巻き込まれ、止む無く剣で物事を解決した事もある。もし途中で盗賊が向かってこようものなら、今回ばかりはサリエリの仇とばかりに容赦無く斬り倒すつもりだった。

ウエルテは馬の鳴らす蹄の音で我に返った。さつきから何度も、荷台を膨らませた多くの荷馬車が、ウエルテを追い越したり、すれ違ったりした。この街道はアグレッサを支える大動脈の一つであり、



使われている馬車や馬などの運搬手段は全てアグレッツサ荷車ギルドに加盟しているか、もしくはギルドと提携した領外の商人のものだった。

街を出て一時間半ばかり歩くと、街道は鬱蒼とした森の入口に差し掛かる。アグレッツサ領の西に広がる霞の森の入口だった。街道は森を切り払ってまっすぐ西のノックス砦へと繋がっている。今日の空は曇り。霞の森には薄いもやが掛かっていた。舗装された街道をしばらく進むと、木々を伐採してつくった、馬車が二台並んで通れるくらいの幅の砂利道が右手にあらわれる。

ウエルテは街道を離れ、森の奥へと繋がるその枝道へと進んでいった。街道から逸れた途端、人の往来はほとんど無くなった。この先、道は何度か枝分かれして、領主直轄農地であるエルベ莊園へとつながっている。帽子やクロークがもやに晒されて湿ってゆく。じめじめとして涼しい森だ。耳に届くのは小鳥の声と砂利を踏みしめる足音だけだ。ウエルテが足を進めると、道の右側に丸太でつくられた人の背丈ほどの塀があらわれた。塀はまるで砦の柵のように森の奥からこの枝道の横を走り、また森の奥のほうへと続いている。塀の奥は領主専用の狩猟用鳥獣保護区になっており、許可の無い者の立ち入りは硬く禁じられていた。その塀は、保護区内の鹿や猪、狐など、狩りの獲物が外へ逃げてしまうこと防ぐ為のもので、森の恵の枯渴を防ぎその独占を保証するためのものだった。

塀が見えなくなり、さらに歩きつづけると森が広く切り開かれた耕作地に出る。簡単な木の柵を越え、ウエルテはエルベ莊園へとやってきた。開けた視界には耕作地が広がり、そのまん中にこじんまりとした集落がある。ウエルテは畑のあぜ道をつたって集落へと向かった。そこでは農夫達が、藁をふいた家のひさしの下にしゃがみ、硬そうなパンをかじっている。ちょうど昼食の時間だったようだ。

「こんにちはー」

ウエルテが挨拶すると、農夫達は顔を上げた。

「毎度どーも、お役人様」

「あんれ、今日もおいでですか？ たすか昨日も、よく肥えた方が口バに乗って、来なすったけども？」

やはりサリエリはここへは来ていたんだ。

「今日はちよつと別件で。そういえば、そいつ昨日はいつ頃ここ通ったか判りますか？」

「丁度、昼飯の一時半ほど前だったかね？」

ウエルテは愛想良く笑ってうなずいた。

「そつか、ありがとう。お邪魔しました」

ウエルテは足早に集落を通り抜けると、ウエルテは先程よりも厳しい表情になった。今、アグレッツサは収穫期を迎え、最も食料が豊富な時期だった。この時期は貧しい小作農ですら、それなりの贅沢が許される季節だった。だが、今見た農民達は二人一組で一つのパンを分けて食べていた。それ以上にウエルテが驚いたのは、昼食がその半切れのパンだけだったことだ。数週間前に来た時は、彼らも野菜や煮込み料理などのおかずも食べていた。今年の穀物の収穫数は危機的に少ないのではと感じ、ウエルテは強い不安を感じ始めた。食糧不足は農村だけでなくその地域一帯の安全を脅かすからだ。

そのまま、ウエルテは村はずれにある粉挽き小屋へと向かった。

粉挽き小屋は荘園に流れる小川の辺に建てられていて、小屋の横には動力の源である水車が回っていた。そして、小川の向うには三階建ての頑丈な石造りの館が建っている。それは、マナーハウスと呼ばれる領主の別宅と代官所を兼ねた建物で、荘園の農民達を監督する役人達が詰めている。

もつとも、ウエルテがいつも仕事で訪れるのはマナーハウスではなく、その手前の粉挽き小屋の方だった。この村は領主の荘園にあるので、その地代はすべて荘園付きの代官に直接納められる。だが、直接農業に従事していない粉挽き業者だけはウエルテのような徴税吏を通して領主に税を納めていた。

ウエルテの背丈の二倍半はあるかという大きな下射式水車が水音を立てながらゆっくりと回っている。木造の粉挽き小屋の開け放た

れたドアから中を覗くと、粉屋のヒッグスが昼飯を貪っていた。小屋の作業場では木でできた齒車が組み合わされ、大きな石臼が回っている。

「また来たのか！ 支払いは昨日済んだはずだぞ」

ウエルテを見るなり、太つちよのヒッグスは小屋の騒音に負けないように怒鳴る。

「ということとは、昨日、僕の代理が来たんだな？」

「何訳の判らないこと言つてやがる。おたくが風邪引いたからつて、ロバに乗つたでかい奴を寄越しただろう？ こっちは二十シルバも分捕られて涙もでねえよ！」

ウエルテはうなずいた。サリエリはここでウエルテの替わりに、きちんとヒッグスから税を徴収していったのだ。

「ならいい、別に徴収に来たわけじゃない」

そう言つと、粉屋は少し落ち着いた様子で昼食を再開した。粗末な小さいテーブルの上には硬いパンと肉団子の入ったスープにオレンジ、それにエールである。

どこの村でも粉屋は儲かる商売だった。というのも、農民が領主へ地代を納める場合、主要作物である麦を粉にした上で換金してから納めなければならなかった。だから、農民は水車小屋と大きな臼を持つ粉挽き屋に依頼して粉にした上で現金に換えてもらっていた。その際、必ず粉屋から加工賃と手数料をとられるのはいうまでもない。だったら、農民は自分で麦を粉にすればいいのではということになるが、この大陸の西側では、各地の領主が石臼と粉挽きの権益を完全に押さえていた。一般市民や農民による石臼の所有は厳しく制限され、粉挽き業は完全な免許制がとられていた。

ことアグレッツサでは、もぐりの粉挽き行為は重罪であり、見つかった者は青騎士隊によつて容赦無く両手首を切り落とされた。もし粉屋を始めようと思う者は最初に、領主へ莫大な免許料を支払つて石臼や水車小屋を設置する権限をもらい、毎月特別税を払いつづける必要があつた。だがそれらの負担を差し引いても、粉屋は実入り

多い商売だった。

「で、何しに来たんだよ？」

ヒッグスはスープをズルズルとすすりながら訝しげな目でウエルテを見た。ウエルテは腕を組んで壁に寄りかかり、回っている石臼を見ながら言った。

「ここへ来た僕の代理…… 昨日、森で殺された。犯人を探してる」  
ヒッグスがむせて顔を上げた。

「おい、冗談だろ？」

ウエルテの真面目な顔を見てヒッグスは表情を硬くした。

「どこでやられたんだ？」

「街道沿いのわき道で森の入口に近いところとだけ聞いている。彼が来て、何か変わったことは無かった？」

ヒッグスは首を振った。

「知らん、知らん。俺は言われるまま今月の水車税と臼税を払って

…… いいか俺は確かにちゃんと二十シルバ払ったんだぞ？」

「それはわかったから、それで彼はどうしたんだ？」

「ロバに乗って来た道の方へ帰ったよ。なんか、まだ回るところがあるとか言ってたな」

ウエルテはため息をついてうなずいた。

小川の向うに見えるマナーハウスの入口では、数人の男達が長剣を研いでいる姿が小さく見えた。

「ずいぶんと賑やかだな、領主はまた狩猟会でも開くのか？」

平時に大きな剣を差しているのは騎士や兵士を除けば、猟師くらいのものだ。

「かもな…… 俺達には関係ねえよ。ただ、なんか狩人みたいなやつらが大勢来ていて、ちょっと騒がしいんだ。あ、そっぴや……」  
ヒッグスは食卓から顔を上げてマナーハウスの方を見た。

「昨日は丁度、ギルドの荷馬車が何台か来ていて、食い物をやたらあの館へ運び込んでいた。おたくのその気の毒な奴が、宴でも開かれるのかって聞くから、わからねえって答えたけど、なんか興味深

々って感じで見てたぜ」

ヒッグスの話を聞きながら、ウエルテはマナーハウスを見つめていた。三角帽を被った代官所の役人らしき男達が、ウエルテのいる水車小屋を警戒するように見つめていた。

「そうか、ありがとう。食事中にお邪魔様」

ウエルテはそう言って水車小屋を後に、元来た道を引き返しはじめた。敢えてマナーハウスの方を見ないように歩いてきたが、村はずれで一度振り返ってみると、三角帽の男達は依然、ウエルテをじっと見張っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8596v/>

---

止めのファンデブ

2011年9月25日09時09分発行